

BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA

十二分類解説

はじめに

このほどホームページ掲載を期に、私の作品の整理分類基準を作成しました。チベット仏画特有の尊格には、わが国における従前の仏画分類におさまりきらないものがあること。あるいは描く側からの視点や、仏画を求める人々の心持ちとかありようにおいての彼我差というものも考慮したつもりです。もちろん学術的にも正鵠を得ていることを大前提としています。

分類1から7までは描かれた主尊による分類で、基本的に仏、如来、菩薩というような世俗呼称区分に則しています。なお曼荼羅には中心となる尊格があるのですが、その尊格の分類にそれぞれの曼荼羅を配置するのではなく、曼荼羅そのものを独立した一つのカテゴリーとしています。

「8.浄土図」以降は表現形態による分類としています。したがってこれら1から7の分類と排他するものではありません。作品によって複数分類に属するものがあります。阿弥陀如来浄土図という作品を例にとると、主尊は「如来」であり作品形態は「浄土図」となります。多羅菩薩という尊格を例にとれば「菩薩」と「女性尊」どちらの分類にも属します。ホームページで作品をわかりやすく見ていただくという観点から、どちらの分類からも検索できるように、メニューの記載は双方に行われています。

その他全般的な特記事項として、複数尊格が描かれているタンカについて述べておきます。例えばツェラ・ナム・スム（長寿三尊図）のように、三尊いずれもが主尊とみなし得るという例がチベット・タンカにはあります。この場合どの尊者を主尊として分類するかという点を考えることになります。主尊と脇侍が明確に分かれている日本仏画と異なる点です。このような場合便宜的に中央に座する尊格（中尊）をもって分類をするという事を原則としました。ただしタンカ全体のテーマに即して分類を行うほうが良いと考えたケースもあります。

ここで述べた以外にもいくつかの理由により複数分類メニューに重複して掲載されている作品があります。それらについて個別に解説を加えています。なお以下の個別分類説明でジャンルの次のカッコ書きは2020年8月21日時点での掲載作品数です。掲載総数は172点ですが、各分類の数字の合計はそれ以上になります。

BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA



1. 釈迦牟尼仏陀 (30 点)

釈迦については作例が多い為と、やはり別格であろう、として独立した分類が設けられています。教相判釈のように杓子定規に突っ張れば、釈迦も如来だという言い方になりますが、そもそもそのような頑迷固陋な考え方ほど仏の教えから遠いものはありません。あまりこだわらず、人情あるい絵師の思い入れと解釈してご鑑賞ください。



2. 仏陀・如来 (17 点)

したがって「釈迦牟尼仏陀以外の仏、如来」を第2分類としました。これに特に解説は不要と思われます。なおこの分類に弥勒仏が入っています。わが国では圧倒的に「弥勒菩薩」が人口に膾炙していますが、チベットでは仏としての弥勒信仰もあります。詳細は作品解説をご参照ください。

3. 菩薩 (63 点)

この分類については観音、多羅とその他に三分割しています。こちらは人情の入る余地はあまり無く、作品数によるもので、はっきり言えば編集者の都合と言えます。メニュー画面があまりダラダラ長いと見にくいので、メニューを次のように分割させていただきました。あくまで第3分類のなかでのアレンジです。

3-1 観音菩薩 (29 点)

3-2 多羅菩薩 (24 点)

3-3 その他の菩薩 (10 点)



4. 祖師像 (5 点)

日本の仏教各派でも、宗祖や傑出した師たちを讃えるため、その肖像画が描かれたり像がつくられ、信仰対象となっています。チベット仏教ではその特異な宗教的体系のためもある、修行者が自らの師として崇める人物の重要さには絶大なものがあります。そのためチベット仏教四大宗派（ゲルク、カギュ、サキヤ、ニンマ）では開祖は勿論のこと、偉大な功績を残した僧侶達の肖像や伝記を描いたタンカが数多く存在し、ひとつのジャンルを形成しています。



BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA



5. イダム／守護尊（11 点）

特筆すべき尊格はイダム（守護尊）です。チベット仏教で重要な尊格であるイダムという概念は日本仏教では余りなじみがありません。あえて日本語に訳すと守護尊となり、修行者の守護となる尊格で、まぎらわしいのですが護法尊とは別格です。チベット仏教では修行過程において、各自の資質、性格などに従い、師がその修行者にふさわしいと思われる密教聖典（タントラ）灌頂を授けます。そのタントラの本尊がイダムで、一般にイダムは恐ろしい形相をしているので、各自の修行の守り神としてふさわしいとされたと言われています。その後各人はイダムを守り本尊として修行を続けてゆくことになります。この時に修行者は自分のイダムを主尊とした曼荼羅を持つことが通常です。



6. 護法尊（4 点）

仏法を守護する神のことを護法尊と呼び、古代インド仏教では主にヒンドウの神々がその任を担っていました。

代表的なものとして梵天、帝釈天、あるいは四天王、十二神将などがあります。これらに加えチベットでは土着の神々が仏法を守護しているため、さまざまな護法尊が居ます。密教で高僧、行

者に仕えてこれを守護し、聖俗両界にわたって使役される神靈のことを護法善神と呼ぶこともあり、この定義にしたがえば孫悟空や猪八戒なんかもその例に在ることになります。

7. 曼荼羅（17 点）

曼荼羅については別項曼荼羅解説をご参照ください。ここではチベット仏教でイダムとマンダラが対を成していることを指摘しておきます。そのようなチベット仏教に特有な作品なので、イダムページからマンダラページにジャンプできるようにボタンを表示していますのでご利用ください。



8. 浄土図（6 点）

如来がおわすのが浄土であります。へ理屈を言えばすべての仏画は浄土図なのです。浄土だけつまり背景だけを描いたものではありません。必ず主尊が描かれます。阿弥陀如来浄土図を例にとると「如来図」であり同時に「浄土図」です。このような作品ではどちらの分類メニューからも選択できるようになっていることは前述したとおりです。



BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA



9. 赤タンカ・黒タンカ (14 点)

一般に背景が黒で覆われているものを黒タンカ、赤が支配的なものを赤タンカと称します。チベットで前者をナクタン

ン後者をマルタンと称します。これらも主尊となる尊像ジャンルに関係がなく、絵表現形態による区分です。したがって主尊に多種多様な尊像が考えられます。伝統的なチベット・タンカでは、忿怒尊が主尊の場合黒タンカとなり、寂静尊の場合赤タンカとなるという原則がありますが、私の場合その区別は曖昧で、その意味で創作画と分類したほうが妥当と言えそうな作品もあります。



10. 女性尊 (34 点)

仏教界では元来女性は罪多きものとして修行に適さず、男性として生まれ変わってこなければ、悟りは開けないと

されていました。元来と言いましたが厳密なものではありません。お釈迦様がそう言ったという事実はどこにもありません。それどころか法華経には女人往生が説かれています。釈迦説法が世につれ人につれ、信仰として定着するにあたり、世俗思想や生活習慣と融合して変質していった一つの例とも考えら

れます。その為観音、文殊、普賢など諸菩薩は見掛けはともあれすべて男性とされてきたのです。しかし大乘仏教思想発展に伴い、女性も女性身のままで成仏できるという思想が現れたのです。一方チベットでは密教教義のなかから女性でありながら仏と同格地位にある仏母という尊格が生まれたのです。

11. 羅漢図 (8 点)



ここに分類された作品において、羅漢は主尊の周りを取りまく存在として描かれています。とりまくというこ

との宗教的な意味が重要な点で、単なる背景でないことは言うにおよびません。完全な功德を象徴する仏陀に対し、有情でありながら三界六道に迷う衆生として配置された存在が羅漢なのです。日本では羅漢様のみを描いた「羅漢図」は珍しいものでありませんが、チベットでは羅漢のみを描くということはしません。厳密に言うとチベットにおいても羅漢のみを描くことが全く無いわけでありませんが、その場合「羅漢図」でなく「祖師像」として描かれます。羅漢図に関してこれ以上の述懐は避けませんが、分類についての考え方は浄土図と同様です。例えば「弥勒仏と九羅漢」という作品、厳密に言うと日本で羅漢図と分類されないかもしれませんが。しかしながらこの例で「弥勒如来」でも検索でき、また「羅漢」でも検索ができることが望ましいと思っています。

BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA



12. 創作画 (39 点)

創作的な画題を描いた作品
やチベットタンカ本来の儀軌
から離れ、私独自の技法によ
って描いた作品のために「創

作画」という分類をもうけました。もともとダラムサラ滞在中でも色使いなど点において、純粋なチベット伝統色にこだわらずに独自の描き方をしてきました。ただそれらは言わば個性というレベルのもので、創作と呼ぶまでに到っていなかったものなのです。帰国以来日本文化に浸かりながら、自由に想念のおもむくままに筆をはしらせていると、いままでと異なった、創作画と呼ぶほかないような作品がうまれてきています。自由に重複をゆるすという原則はここ創作画においてもっとも効果的にあらわれます。前述のように女性菩薩という尊格がチベット仏教には存在するのですが、そ場合「菩薩」であり「女性尊」でもあります。さらにそれが結果として「創作画」であるということもあるのです。